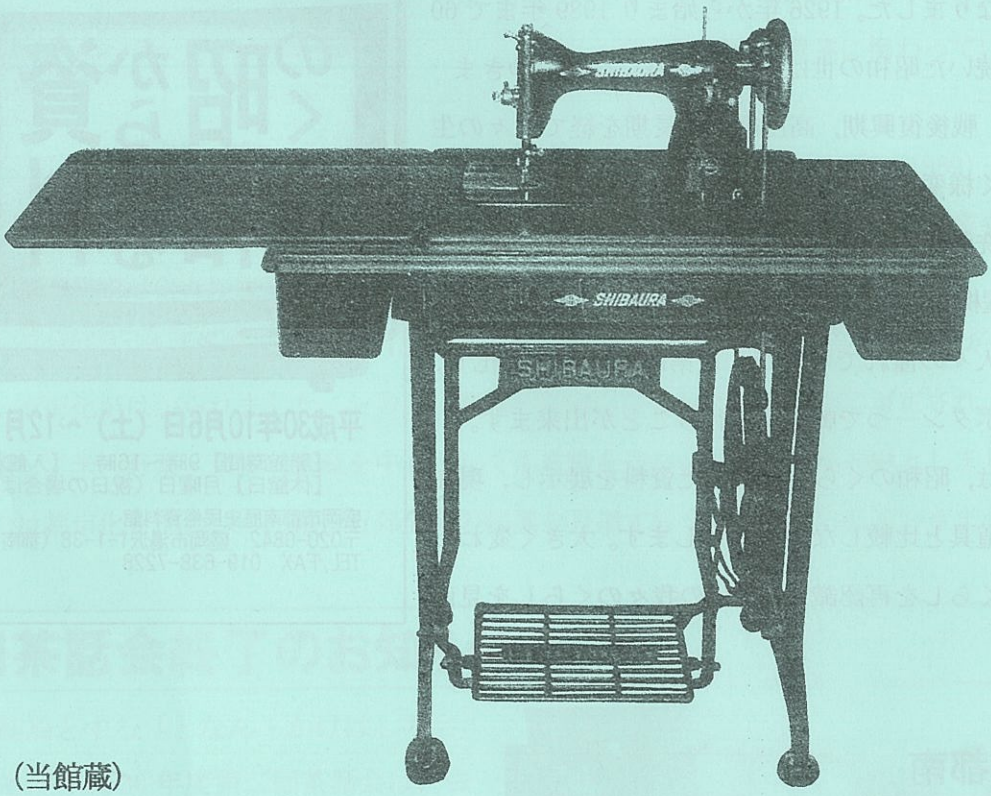
れきみん
となん歴民だより vol.56

Morioka tonan history and folklore museum　平成30年9月30日発行

発行　盛岡市都南歴史民俗資料館　盛岡市湯沢1-1-38　Tel/Fax 019-638-7228



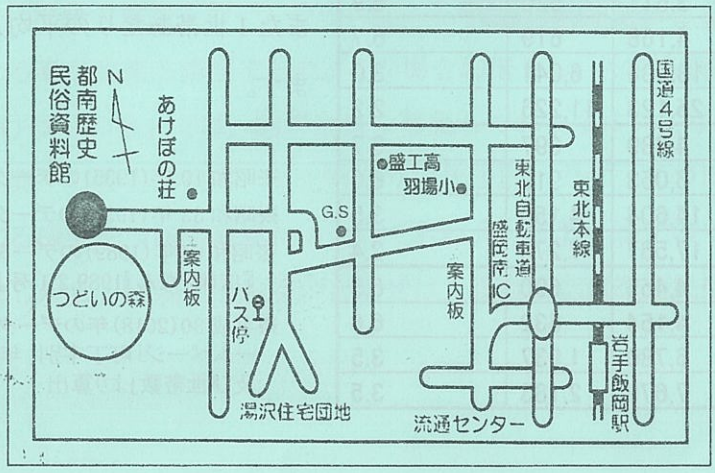
足踏みミシン（当館蔵）

是非ご来館ください。お待ちしております。

— もくじ —

○企画展「資料からみる昭和のくらし」のご案内
○第二回茶話会終了のお知らせ
○資料は語る㊻
○盛岡市所在指定・登録文化財紹介㊻
○となんの昔ばなし㊻

MAP☆ACCESS



○利用案内

開館時間
午前9時から
午後4時まで

入館料
無　料

休館日
月曜日
（休日に当たるときは、直近の平日）、年末年始

企画展「資料からみる昭和のくらし」のご案内

当館では，平成30年10月6日（土）～12月16日（日）の期間，企画展「資料からみる昭和のくらし」を開催いたします。

平成の世は，2019年4月30日をもって終わりを告げることになりました。1926年から始まり1989年まで60年以上も続いた昭和の世はどんどん遠くなってゆきます。大戦，戦後復興期，高度経済成長期を経て人々の生活が大きく様変わりした時代こそ昭和でした。

かつて洗濯は，洗濯板を使い手作業で行う重労働でしたが，洗濯機が登場します。電気洗濯機は「三種の神器」と呼ばれ人々の憧れでしたが，次第に普及し，進化し，現在ではボタン一つで乾燥まで行うことが出来ます。

本展では，昭和のくらしを彩った資料を展示し，現在の生活の道具と比較しながら紹介します。大きく変わった昭和のくらしを再認識し，現代の我々のくらしを見直します。

平成30年10月6日（土）～12月16日（日）

【開館時間】9時～16時　【入館料】無料
【休館日】月曜日（祝日の場合は翌平日）

盛岡市都南歴史民俗資料館
〒020-0842　盛岡市湯沢1-1-38（都南つどいの森内）
TEL/FAX　019-638-7228

昭和の都南

●昭和から平成にかけての都南地区の人口と世帯数の推移

ここでは，都南地区の人口の推移の様子を見てみます。以下の表とグラフは，昭和10年（1935），同33年（1958），同64年（1989），平成30年（2018）のものです。昭和10年と33年との間が23年である以外は，約30年ごとのデータです。

戦後の昭和後半に人口が大きく増加しており，また1世帯あたりの平均人数も大幅に減少しています。

		人口	世帯数	1世帯あたり平均人数
見前地区	昭和10年	3,611	520	6.9
	昭和33年	4,168	619	6.7
	昭和64年	18,036	6,041	3.0
	平成30年	25,123	11,226	2.2
飯岡地区	昭和10年	4,689	697	6.7
	昭和33年	6,053	919	6.6
	昭和64年	14,604	4,150	3.5
	平成30年	17,567	7,270	2.4
乙部地区	昭和10年	4,455	690	6.5
	昭和33年	4,154	632	6.6
	昭和64年	6,780	1,937	3.5
	平成30年	7,679	2,183	3.5

※昭和10年(1935)のデータは『都南村誌』による
※昭和33年(1958)のデータは都南村調査による
※昭和64年(1989)のデータは1月1日のもの。『広報となん』1989.2.1号より
※平成30(2018)年のデータは3月末のもの。盛岡市ホームページ「町丁字別、年齢5歳階級別、男女別人口及び世帯数」より算出

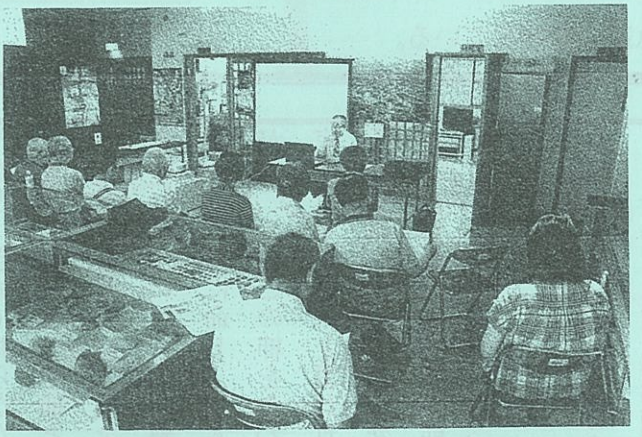
●昭和の都南～農村から都市化へ～

昭和30年（1955）4月1日，飯岡村・見前村・乙部村の3村が合併し，都南村が誕生しました。都南村は県都盛岡市の都市近郊農村として発展しました。昭和33年（1958）の調査によれば，見前地区で71.9%，飯岡地区で87%，乙部地区で76%の家庭が農業に携わっていたことがわかります。

しかし，昭和44年（1969）の『広報となん』において，農家戸数は増加しているものの農業人口は減少傾向にあることから，農業を主とする農家が減少し兼業農家が年々増加していることが指摘されています。

昭和45年（1970）には「新都市計画法」により，津志田・三本柳など約699ヘクタールが市街化区域に指定され，市街化がはかられました。一方，「都南村新総合開発計画」が同年に策定され，高度な近郊農業を目指して米・野菜・果樹・畜産を中心として生産性を高めることを基本計画としました。こうして都南村では都市化を進めつつ，都市近郊農業の振興を目指す村づくりが行われていきました。

第二回茶話会終了のお知らせ

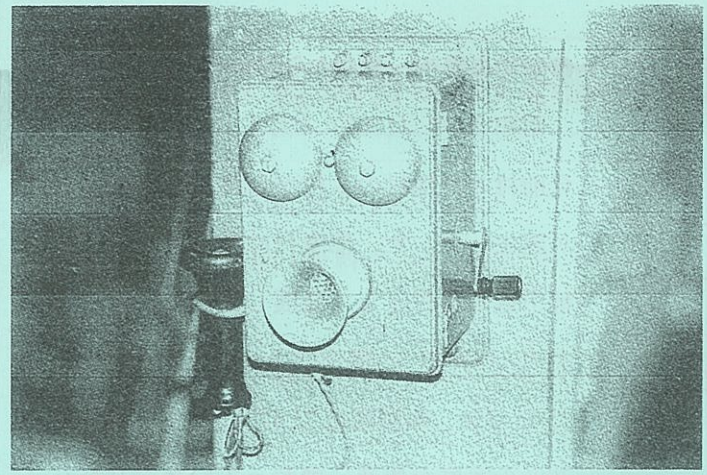


当館を事務局とする「となん・かけはしの会」の活動である，平成30年度第二回茶話会は，去る7月14日（土）に開催されました。講師に元盛岡てがみ館館長の八木橋哲男氏をお招きし，「先人の書簡から学ぶこと」と題した講話を聴講しました。

国分謙吉や佐藤昌介，石川啄木ら先人たちの書簡の画像を使用し，脇付用語の解説を行い，その豊富さと美しさに触れる事が出来る講座でした。この場をお借りし，八木橋様に御礼申し上げます。

なお，「となん・かけはしの会」では，随時会員を募集しております。主な活動は，①茶話会（年6回の講座）②当館事業への協力③史跡・文化財巡り（年1回）です。このほか，会員の調査・研究について意見交流する機会や当館所蔵資料についても紹介しておりますので，ぜひご参加ください。「となん・かけはしの会」に関するお問い合わせは，盛岡市都南歴史民俗資料館　019－638－7228まで。

資料は語る56



【デルビル3枚磁石電話機】

この電話機は，内蔵された磁石式発電機のハンドルを回して電流を起こし，電話局を呼び出すもので「磁石式」と呼ばれている。送話器の構造が簡単で維持も容易だったので，市内通話用として，昭和40年（1965）頃まで使用された。

なお，盛岡市内に電話局が開局したのは明治41年（1908）1月25日で，146台の加入だった。都南地区における電話加入者数は，昭和16年（1941）で17台，同30年（1955）で31台，同36年（1961）で124台だったが，同46年（1971）で2,429台，翌47年（1972）で3,374台と都市化進行につれて急速に増加している。

盛岡市所在指定・登録文化財紹介56

市指定無形民俗文化財

高舘剣舞

大ヶ生（おおがゆう）地区に伝わる剣舞で，源義家が奥州を征伐するために安倍氏の高舘を攻めた時，兵士の士気を鼓舞するため勇壮な「阿修羅（あしゅら）踊り」を踊ったのが高舘剣舞の始まりとされています。現在は3巻の巻物が庭元宅に残され，地元には剣舞供養塔が建てられています。ほとんどの踊りが「入端」「中踊り」「引端」で一庭となっています。踊りは太夫，太鼓，笛，鉦，そして舞手で構成され，扇や剣，太刀などを持って勇壮に踊ります。

参考文献：盛岡市教育委員会『もりおかの文化財』(2008)

『大ヶ生玄蕃と大ヶ生柿』前編　となんの昔ばなし五十六

斯波氏の家来に大ヶ生玄蕃というものがあった。本名は川村といい、俵藤太藤原秀郷の子孫であるという。大ヶ生の里に来り、この地の主として土民の帰服高く、大ヶ生殿と称していた。

子供二人あり、長男太郎は妾腹の子であり、二男治郎は大ヶ生で生れた子であった。一郷のものどもは、治郎を家督にしてあとを継がせるようにといつも大ヶ生殿に懇請していた。大ヶ生殿は太郎が長男であるから家督にするのは、この子であるとかねがね思っていたものの、領内の人たちの強い願いをふりきって、太郎を家督にしたなら自分の死後になってどのような騒ぎがおこり平和が乱れると思い、家督は誰だということはきめておらなかった。

大ヶ生には大ヶ生柿といって、種なしの名物の柿があり、もしこの実を食い、種を食いあてたものには大いに幸があるといわれていた。柿が熟した秋のことであった。大ヶ生殿は村々の長者に命じ、柿を持ってくるようにおふれを出し、「わが子二人にこの柿を食わせ、種の当ったものを、大ヶ生氏の家督にする。」と言われた。そして赤く熟した柿を盆の上にもりあげて兄弟の前に供えた。

出典：『となんの民話』（都南歴史民俗資料館、一九八八）

参考：伊藤祐清著『祐清私記』